

平成28年度 課程博士学位請求論文要旨

中国仏教における天台と三論の比較研究

林 瑞蘭

本論文は中国仏教における天台と三論両学派の比較研究を目的とするものである。特に天台宗の大成者智顛と三論学派の大成者吉蔵とを比較の対象に取り上げ、両者の教学や実践の共通性と異質性について検討しようとするものである。智顛と吉蔵の間には教学上の共通点が多いとされているが、どこが同じで、どこが違うのか。このような両者の同異を具体的に、仏性に関する理解、経典に対する態度と理解、特に『法華経』と『涅槃経』に対する解釈、実践修道に対する態度などの諸点から比較検討し、明らかにしようとするのが本論のねらいである。

本論文は、序論と五章から成る本論、それと結論とによって構成されている。序論では、智顛、吉蔵二人の仏教者が生きた南北朝末から隋、唐初にかけての時代の概況を伺い、その時代認識の基に両者を検討する。その際に必要になるのが先行研究であるから、仏性研究において今日でも価値を失わない常盤大定著『仏性の研究』から最近の研究に至るまでの主要な先行業績を概観した。

本論第一章「智顛と吉蔵の仏性説」では両者の仏性説を比較検討する。第一節「吉蔵の仏性説—智顛との比較において—」では、吉蔵の五種仏性説を取り上げ、その理解が中観思想によってなされていることを論じ、『涅槃経』の理解では智顛に似るも、その五種仏性説は経に忠実な解釈の結果であり、吉蔵における仏性説の中心となるのは中道仏性たる正因仏性であることを論じる。その一方で、智顛の三因仏性説は同じ『涅槃経』に依り、吉蔵と同様に十二因縁を仏性の中心に据えながら、吉蔵の仏性説の内容とは異なる縁因仏性を立てている。これは十二因縁を悟り、仏性を開顕する修行を縁因仏性とし、仏性の開発修行を仏性の一要素として組み込んだものである。この点に智顛の実践的な理解を窺うことができるが、これが吉蔵との大きな相違点であろう。

第二節「草木成仏説における天台と三論の同異」では、草木成仏説について天台と三論の所説の相違を検討した。三論、天台ともに空観に基づいて依正不二が言われ、有情と非情の不二相即から草木成仏が主張された。ただし三論は、吉蔵に見られるように、理論としては草木成仏は可能だが、実際は草木は心をもたないので、現実としては草木成仏は不可能であるとして、理論のみにとどまった。一方、天台は空観に基づいていることは三論と同じだが、そこには一心三観による三諦円融、一念三千、一色一香無非中道の思想により、有情・非情の別なく成仏可能であると説いている。

智顛の「一念三千」「一色一香無非中道」を基礎にして、湛然は有情と無情の区別を一層取り払い、草木成仏を主張したのである。

第二章「智顛と吉蔵の経典観」では智顛と吉蔵の経典観の相違を検討した。第一節「智顛と吉蔵—経典観を中心とした両者の比較—」では、智顛は後世五時八教と称される教判を確立して、諸経の上に『法華経』を置く法華至上主義の立場を取ったが、一方、吉蔵の経典に対する基本的立場は、諸大乘経典は「顕道無異」であるとして、基本的に同価値であるとした。この点が大きな相違である。しかし、吉蔵も智顛と同じく『法華経』『涅槃経』を重視している点は両者共通するものがある。

また、四悉檀に対する解釈は、智顛が仏の衆生教化を前提とした主体的実践的解釈を取るのに対し、吉蔵はあくまで経典解釈の方法として捉えている点が好対照をなしている

いえる。この点は両者の重要な相違といえる。

第二節「吉蔵の經典觀一天台との比較を通して」では前節の吉蔵の經典觀をさらに検討した。その結果、吉蔵の經典に対する見方は教判否定の態度で、大小乗に限らず、經典同士の間にも優劣を認めないというものであることが分かった。声聞蔵・菩薩蔵の二蔵は浄影寺慧遠の影響とされているが、吉蔵は無得正觀の実践的立場に立って、その二蔵の対立をも解消しようとしている。これは吉蔵の經典觀の大きな特徴であると考えられる。

第三章「天台と三論の『涅槃經』『法華經』解釈」では、前章で明らかになった両者の經典觀の相違を踏まえて、智顛と吉蔵の『涅槃經』と『法華經』に対する解釈の相違を検討した。第一節「章安灌頂と吉蔵の『涅槃經』解釈の比較について」では、灌頂の『涅槃經玄義』と吉蔵の『涅槃經遊意』を比較検討した。両書の間には援用関係があることが既に指摘されていたが、さらに検討の結果、灌頂は吉蔵の『涅槃經遊意』を参照しながら『涅槃經玄義』を作成したが、その作成の態度は、自説と異なる場合には吉蔵の説を「有る人言わく」として他説として出して批判し、そうでない場合は文言に多少変更を加えるなどして、そのまま取り込んで自説とするという方法を採用していることが確認された。このように、灌頂が吉蔵の著作から引用する場合でも、無批判に取り込むのではなく、明確な自覚的意識のもとに批判的に取り込んでいることが明らかとなった。

第二節「『涅槃經遊意』に見える吉蔵の仏性説について」では、吉蔵の仏性説について、『涅槃經遊意』を中心に検討を加え、次のような結果を得た。吉蔵は『涅槃經』について六段構成でその全体の意趣を表そうとしているが、仏性に関しては「明用段」中の「照境の用」の部分で、「本有」「始有」ということについて、靈味の宝亮、法瑤、開善寺智蔵の三師の説を挙げ、これを順次批判することによって、自身の立場を表している。その批判の言から窺える吉蔵の立場は、無得正觀の立場からする仏性解釈であり、どちらかの一方に偏しない中道の立場であることが理解できる。

第三節「智顛と吉蔵の『法華經』解釈—「小善成仏」に対する解釈の異同—」では、『法華經』方便品の小善成仏の部分について、智顛と吉蔵の解釈の同異を検討した。その結果は以下の通りである。すなわち、智顛は小善成仏の易行を、三乗の修行者の行でなく、凡夫の行であると位置づけており、また、教行人理の一を説き、人天二乗も菩薩であるから、成仏可能であるとした。さらにその根拠として、三因仏性説による解釈を示していた。

一方、吉蔵は小善成仏の易行を同じく人天乗の行と位置づけたが、その価値付けは智顛よりも一層低いものとして扱っているように考えられる。それは成仏の因となる人天の善根も成仏の「遠縁」とし、「遠乗」と表現していることから窺われる。したがって、吉蔵にとって、『法華經』の本質は小善成仏のような易行にあるのではなく、二乗の聖人も理解不可能のような、深い意義を持ったものと解釈するのである。したがって吉蔵においては小善成仏の評価はあまり高くない。

第四節「智顛と吉蔵の『法華經』寿量品解釈の異同」では、『法華經』の寿量品について、まず光宅寺法雲の解釈を検討し、それに対して智顛と吉蔵がそれぞれどのように対応したかを検討した。まず、法雲は五時判に依って『涅槃經』を最上の經と考え、そこには仏身常住が説かれているとしていた。その仏身常住説との対比から『法華經』の仏身無量を見たために、『法華經』の仏身は無常であるとする見方に立った。

この仏身無常説に対して厳しい批判を投げかけたのが智顛と吉蔵であった。両者ともに

に論点が共通しており、両者の主張は一見似通っている。しかし、根本的に異なるのは、智顛が『法華経』至上主義に立って『法華経』の優位性を主張したのに対し、吉蔵は「顕道無異」の立場から経典間の優劣を認めなかった点であろう。

第四章「光宅寺法雲と智顛・吉蔵の関係」の第一節「吉蔵による光宅寺法雲批判—吉蔵の法華注疏を中心に—」では、智顛・吉蔵両者にとって、批判し、乗り越えるべき存在であった光宅寺法雲について、吉蔵がどのような批判を展開しているかという点について検討した。法雲説に対する批判は、経の迹門部分に集中しているが、その主な内容は、法雲の経に対する因果説と、仏身無常説といえる。これは吉蔵の法雲批判が、『法華経』に仏性と仏身常住が『涅槃経』と同様に説かれていることを主張するためであったとする先学の意見を裏付けるものであるが、吉蔵が目指したのは、『法華経』と『涅槃経』の優劣を解消し、彼の大乘経典観である「顕道無異」を立証しようとしたのではないと思われる。

第二節では「天台智顛より見た三論」として、智顛著作中で三論について言及されている部分を抽出し検討した。智顛著作中に見える「三論」「三論師」「閔河旧解」「撰山」などの呼称で紹介されるものについては、智顛の前期時代の著作中には見られず、また天台三大部中にも見られない。すべてが智顛最晩年の『維摩経疏』であった。このような引用状況からすると、智顛によって三論が批判の対象として明瞭に意識されるようになったのは、晩年になってからのことではないかと思われる。また、引用の内容を見ると、『維摩経』の経文解釈などの場合には、紹介された解釈の内容が具体的で詳細なものがある。このことから、吉蔵以前の三論師たちの講説録あるいは疏が存在していた可能性が大いに考えられる。

第五章は「智顛と吉蔵の実践修行論」として仏性の開顕を目指し成仏道を歩む手段としての修行論を検討した。第一節「智顛の三種止観」では、天台智顛の三種止観について、それぞれを説く『次第禅門』、『六妙門』、『摩訶止観』の三書についてその梗概を検討した。第二節「天台と三論の同異—一心三観と無所得正観—」では、天台の一心三観と三論の無得正観について述べ、両者が根本的な空の立場において一致することを確認した。

最後に結論において、これまでの検討結果をまとめた。その要を取れば、天台と三論の立場として、どちらも空観の立場に立つこと、『法華経』と『涅槃経』を重視していることなど共通点が多く見いだされるが、両者の宗教的あるいは人間的素質の相違もあって、四悉檀に対する解釈などは大きく相違しているといえる。実践修行に関しては三論の文献資料が遺されていない点、検討が困難な問題がある。吉蔵の仏性説は『涅槃経遊意』のほか、吉蔵の著作の処々において述べられており、これらを総合的にまとめる必要がある。これらの問題については今後の課題としたい。